

第三十六回全国漢文教育学会大会

小中高校の部研究発表

令和三年十月三日(日)

リモート開催

漢文教育の展望

〈中学一年故事成語の指導から〉

埼玉県八潮市立八潮中学校

小金澤 豊

一 中学一年生の漢文教材と訓読

(一)教科書教材と漢文訓読

中学校の漢文教材の配当学年を見ると、「故事成語教材」は、各教科書共に第一学年に配されており、第二学年と第三学年には「漢詩教材」「論語教材」のいずれかが充てられている。

前回改訂(平成二十年告示)された中学校学習指導要領国語科第一学年の「伝統的な言語文化に関する事項」には、

文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。

とある。この説明は、平成二十年告示より以前の中学校国語科学習指導要領では、第二学年の指導事項として記載されていた文言である。このことは、今般の改訂で令和三年度より中学校で全面实施となった平成二十九年告示の学習指導要領でも変わらない。

ここで問題となるのは、中学一年生の漢文教材には書き下し文が大きく載せられていて、もとの漢文がほとんど見られないことである。中学校では、現在四社の教科書会社(東京書籍、三省堂、教育出版、光村図書 ※発行者番号順)の国語教科書が使用されているが、もとの漢文が載せられているのは二社だけあり、いずれも欄外の掲載で、文字のポイントも本文より小さくなっている。この状況下で求められることは、漢文そのものの提示さえ十分にされていない状況下の生徒たちに、漢文に対しての理解を浸透させる指導となる。

(二)訓読指導の実際

レ点、一・二点の説明時に試みた指導を以下に述べる。

まず最初に、訓点を付した文と書き下し文とを並べて生徒の前に提示する。

レ点の場合には、たとえば「作文」を示す時に「作」「文」の配色を変えてみると、語順の違いが生徒にも容易に納得できてくる。

一・二点の場合では、「見」「南山」の配色を変えてみる。このときに、それ

ぞれの文字の横に「1」「2」という具合に、語順を示す番号を振る。一字のみの顛倒を意味するレ点の場合は容易に理解できるし、一・二点であれば、「見」の横に「2」「南山」には「1」としておくと、中学一年生段階の生徒にも理解しやすい。

この手順に従って次の提示をしたところ

梅披鏡前之粉
蘭薰珮後之香



梅は鏡前之粉に披き
蘭は珮後之香に薰る

と読むことができた。一昨年の授業であるが、「令和」改元という年ならではの発展学習ということから、生徒の印象にも残ったようであり、このようなことから漢文への興味が喚起された生徒も多く見られた。

二 故事成語教材の指導

(一) 中学校の故事成語教材

現行各教科書中の中学校漢文教材は、「故事成語」「漢詩」「論語」に大別できる。その中で故事成語だけは各教科書共に第一学年段階の配当になっている。また、各社共に教材として「矛盾」を採っている。

さて、本学会では、小中学生を対象とした故事成語の本『知っておきたい教科書に出てくる故事成語』（全国漢文教育学会編・汐文社）を二〇一八年に出版した。

内容構成では、「○○って、たとえばこういうこと！」という欄を設けて、読者である児童生徒にわかりやすいように身近な学校や地域社会での一場面を紹介。さらに、これに続けて「こんなできごとから生まれた言葉だよ」欄で出典に即した物語を紹介する項を設けた。

(二) 故事成語教材の指導の実際

本年度から全面実施される中学校学習指導要領には「古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむこと」が指導の内容として掲げられている。傍線部は従前「味わい」「触れること」とあった部分である。この「古典に親しむ」方策として、生徒に短文を作らせる学習活動を採用入れることにした。

しかし、生徒にありがちな事例として、
「あなたの話は矛盾している」

「A君もB君も五十歩百歩だ」

だけで済ませてしまう場合が多い。これらの文からだけでは、文を作成した生徒が果たして本当にこれらの語彙が定着しているのかどうかを判断することは難しい。このような練習方法ではあまりにも一文が短かすぎ、前後の場面の様子が表現できていないからである。

そこで、『知っておきたい教科書に出てくる故事成語』中の「〇〇って、たとえばこういうこと！」をあらかじめ生徒に閲覧させた後に、故事成語に合った場面を考えさせて文章表現する活動を入れてから発表するといった授業展開を考え実践したところ、具体的な場面を想定して文章表現を行うことのできた生徒が多く見られた。この実践を通して、生徒に適切なモデルを示すことにより、学習内容の定着がより確実なものとなるということである。

【生徒の感想から】

- ・学んだ言葉で作るのはとてもおもしろくて楽しかった。いろいろな言葉で作りたいと思った。
- ・本の例話もおもしろかったし、話を自分で考えて作ることによってわかった。

三 展望

授業の際には、教室に東アジアの掛地図を掛けながら漢文を学ぶこととした。漢文教材指導の際に、歴史的に漢文が使用されていた地域を伝えるために地図を提示しながら説明を加えることは非常に効果的である。ここで地図を持ち出すことには、次の意図がある。漢文がかつて東アジア共通の文字言語として機能した歴史を持つことを、ほとんどの生徒は知らない。漢文が使用された範囲は、中国のみならず朝鮮半島、中央アジア、ベトナムまで広範に及んでいたという歴史的経緯を持つものであるという事実を、漢文の授業の中で伝えることは、生徒も新鮮な驚きを感じた様子であり、教育上からも大きな意味を持つものと考ええる。

【生徒の感想から】

- ・たくさんの国の人が同じ漢文を使っていて、それを今も読むことができるということがすごいと思った。
- ・昔からアルファベットが共通だと思っていただけけれど、昔は漢文が共通だったとわかってびっくりした。

さて、故事成語が教材として採られるようになったのはいつからであろうか。教科書教材を遡りながら確認していくと、明治三十五年の「中学校教授要目」

中に

故事古語等ハ之カ解釈出処ニ関シ徒ニ生徒ヲ苦マシムルコトナク初ヨリ其ノ説明ヲ与フヘシ

とあり、さらに、戦後期の昭和四十五年の学習指導要領には、左のようにあることが確認できる。

短くてやさしい文語文や格言・故事成語、および基本的な古典を適宜用いるようにすること。

ここに見られるように「徒ニ生徒ヲ苦マシムルコトナク」（「中学校教授要目 教授上ノ注意」）「親しみやすく平易なもの」（「中学校学習指導要領 国語」）との表現からわかるように、明治以降戦前期においても戦後期においても、学習者に漢文に対する抵抗感が少なく平易で初歩段階の教材の代表格として故事成語が扱われており、それが現在まで継続しているものと考えられる。

故事成語はといった教材として「平易」なものと言えるのであろうか。故事成語自体について言えば、確かに現代の言語生活の中でもしばしば目にしたるに耳にする機会が多いかも知れない。

一方で、故事成語の出典としてはそれが漢文の文章中から取り出された言葉であることが多く、学習する際にはおのずから長文に触れざるを得ない状況となる。もちろん初めて漢文に接する中学一年生にそのままの漢文を提示するわけにはいかないため、書き下し文や現代語訳で対応することになる。そうなること、「矛盾」「蛇足」などの言葉を聞いたことはあっても、それはあくまでも日本語の文脈中での経験にとどまることであり、漢文教材そのものの「平易」の程度とは必ずしも関係しないこととなる。半数の教科書がもとの漢文を掲載せずに書き下し文のみを載せていることから、漢文教材としての故事成語の在り方が問われているように感じる。

先に見たように、教科書にほとんどもとの漢文が載せられていない現状に照らして考えると、中学一年の生徒が漢文のイメージを抱くことは困難に思える。従前からの、故事成語は「平易」であるから第一学年の配当教材という先入観を一度置き去ることも必要だろう。小学校教科書に古典教材が多く載せられるなってきた現在、それらに採られている文から、新たな中学一年配当教材を探すような努力も、選択肢のひとつとして考えられるのではないだろうか。

現在の学校教育の枠組み上では、漢文指導に充てられる時間もごく限られたものとなっている。このきわめて限定された枠組み内において、生徒の興味関心を育む指導をどのように展開するかという指導の在り方と並行して、より適

切な教材の在り方を考えていくことが、将来を担うべき有為の人材育成の大きな課題と考える次第である。